2 須佐之男神社

撫川、中撫川の日蓮宗信徒以外の神社（中撫川502）

境内の碑文からこの氏子士出或の当時の状況を考えてみた。

須佐之男神社のいわれ

旧社格　村社
鎮座地　岡山市北区中撫川502
氏子地域　　中撫川、撫川

■由緒

往昔、吉備中山に大吉備津彦命鎮座後、十握剣を宝物として彼の社に納めた。寛喜年中（1229～1232）に彼の社が回禄の際、御剣を此の地に遷して奉斎した。御剣を彼の社に奉遷後、御剣の縁に依って須佐之男命天照大御神を跡地に祭った。後、須佐之男神・櫛稲田姫・大穴牟遅神を祭って上社とした。

寛永年中（1624～1644）社号を疫神社とし明治2年現在の社名とした。社殿は寛永6年（1629）、元禄3年（1690）9月、天保6年（1835）8月に夫々再興している。昭和31年8月、本殿炎上。同54年6月に本殿を改築した。

■御祭神

建速須佐之男命

（岡山県神社庁の資料による）

地元の方のお話では、主に真言宗の信徒がお参りをした。
例祭など神社の行事は下社（八幡神社）と全て同日に行われる。
同程度の社を並立させていたのは領主戸川氏の政策だろう。

須佐之男神社の由来

撫川の須佐之男神社の由来は定かではないが、次の伝承が最も信憑性がある。康平 4（1061）年 11 月、吉備津神社が火災で炎上したとき、現在地付近に仮宮を建ててご神体をお祭りしていました。そして康平 7（1064）年、備中守藤原定綱が吉備津神社を再建し、ご神体は本殿に還られ、仮の宮の建物だけが残りました。そこでこの地の有力者が、京都の八坂神社（ご神体は須佐之男命）から分身を受けてきてお祀りをしたと伝えられています。中撫川遺跡の発掘調査によりこの伝承の信憑性がさらに高まりました。

この神社の特徴は、特定の権力者の氏神ではなく、領主的存在者と住民の協力によって、祀られた神様であると考えられることです。したがってはじめから地域の神様であったことです。

創建以来「疫神社」と呼ばれていましたが、明治 2 年の神仏分離令により「須佐之男神社」に改称されました。

中撫川遺跡の発掘調査から考えられることは次のとおりです。

1. この当時（13 世紀）すでにこの地方は発展しており、領主的勢力者があり、神社創建の知識と資力を持っていたと考えられる。

2. この当時都への貢物を納品しており、京都との交流があり、八坂神社の分身を受けることが容易であったと考えられる。

3. 吉備津神社の火災から年月を経ているが、当時は何れの神社仏閣も長い年月を要し、建立再建をした。

参考（山陽新聞平成 15 年 9 月 1 日朝刊）
中撫川遺跡発掘調査の詳細

網用おもり大量出土！

岡山市教育委員会が発掘調査している川入・中撫川遺跡（岡山市中撫川）で 31 日までに、鎌倉時代（13 世紀後半）の 1 個 500g 近い "特大級" の漁業用のおもり（土錘）が大量に出土した。一帯が同時期から発達した鯛網漁などの漁業基地だったことを示す資料として注目されている。

土錘は粘土の素焼き製。ラグビーボールをやや平らにした形で、平均して長さ 11cm、幅 7cm、厚さ 5cm 強の大きさ。遺跡から出土する土錘としては最大クラスな上、今回の 300 個を超える出土数は岡山県内の遺跡では最多になる。

土錘の大多数は両側面に幅 2cm、深さ 1cm の溝があり、縄を結んで網に取り付ける形式。同タイプの大型土錘は考古学、民俗学的な研究から、瀬戸内特有の鯛しばり漁法に代表される袋網系の錘と想定されている。当時、川入、中撫川遺跡は「吉備の穴海」と呼ばれた内湾の沿岸部に立地。土錘とともに中国製の高級磁器も出土していることから、発掘担当の草原孝典・岡山市教育委員会文化財保護課主事は「都などへの貢納品にもなった鯛漁を足がかりに発展した領主勢力がいたのだろう」とみている。

4. 真言宗と須佐之男神社

時代は撫川知行所初代領主戸川達富（みちとみ）の治世で、この神社は真言宗金華山観音院が奉仕したので、法正山信城寺（日蓮宗）が別当として奉仕していた（撫川）八幡神社にたいし、真言宗の宗徒の神社として神事をつかさどった。

明治四年の神仏分離まで領主の庇護の下にあった日蓮宗と、それ以外の宗派の対立は容易には解決せず「真言と法華」の関係は継続している。二つの神社があることは不合理なので一体化の努力はなされている。たとえば祭礼の同一日時実施、釣鐘の同時再鋳、社号記念碑の同時建立など融合の努力は続けられている。

5. 創建の時代

境内参道の中ほどに「享保三年（1715）に奉納された燈籠二基と手水鉢があり、おそらくこの時期に建立されたのであろう。鳥居には銘が刻まれていないが同時代のものと思われる。

【額束に「明治十六年癸未年二月吉日難波政則三男壬牛之年」の記録がある。神仏分離令により今までの「疫神社」から「須佐之男神社」に改め掲額したものである。】

拝殿の入口上部に「明治十五年（1882）壬午本宮、幣殿、拝殿新造営）の奉納額があり、創建以来 160 年以上経過している。したがって、それ以降少なくとも一度は改築していると考えられる。

昭和三十一年（1956）八月に本殿を焼失した。現在の本殿は昭和五十六年（1981）六月に改築された鉄筋コンクリート製の建物である。本殿周囲の玉垣も焼け残った南側以外はコンクリートで改築された。火災により優雅な歴史ある本殿と寄進者の銘が消えた。

鐘楼の創建は「文政六癸未（1823）三月吉良日　別当観音院奉建立」とあった。今から 186 年前の建物である。

本殿の北東 5 メートルにある稲荷神社はその燈籠の銘に「享保十一年（1723）九月吉辰」とあり、疫神社本殿造営の八年後にまつられた。社務所、井戸など整った施設があった。

6. 環境の整備

社殿の南側にある玉垣の石版に寄進者名が刻まれている。社殿の東側 20 ～ 30m に法万寺川（板倉川）が流れ、降雨期には付近の水田は冠水し、遊水地となる湿地帯であった。境内の法面保護のために、延長百間余りの石垣を寄進した。

石板によれば、文久三年（1863）、93 人の氏子が現在の金額に換算して 3 千万円余りを寄進した。なかでも吉岡屋、吉見屋など廻船問屋がその約半額を、特に袖岡新助は全体の 1 割を寄進している。庭瀬が水運で繁栄していたことがわかる。また石板の銘は高度な技巧を持った石職人の技が作った傑作である。

7. 狛犬

嘉永四年（1851）に氏子 20 名が狛犬一対を寄進している。備後尾道の石工嶋居勘十郎の作で、後足で子狛犬をあやす姿が珍しい。

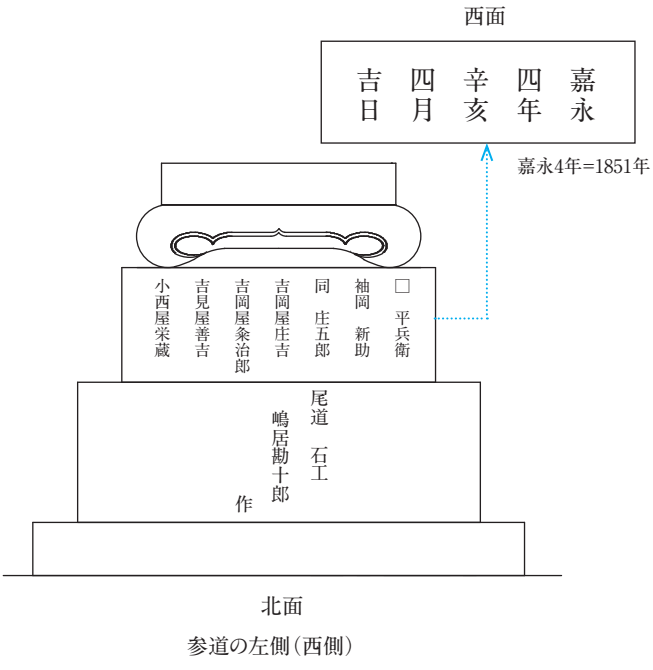
須佐之男神社　配置図

注連柱その2

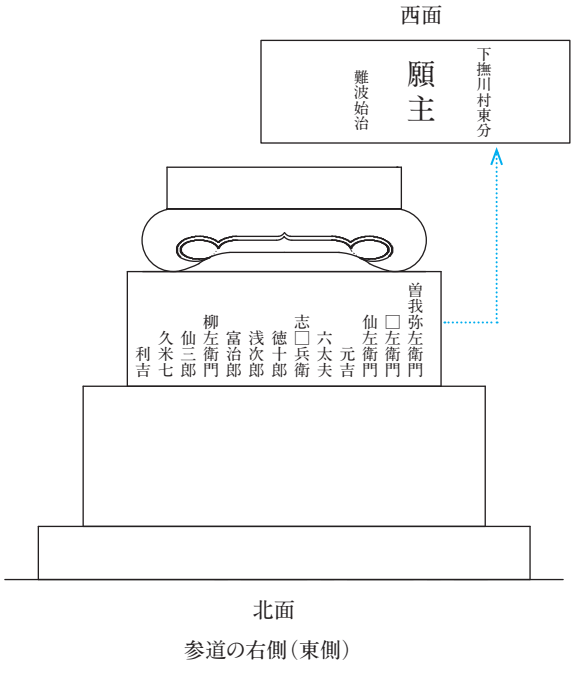
注連柱その1

参道の左側（西側）

参道の右側（東側）



参道の左側（西側）



参道の右側（東側）

石工 嶋居勘十郎久之は、江戸時代後期、尾道の人。尾道浦は瑠璃山、愛宕山、大笠山に囲まれ巨石が折り重なり、石材に囲まれ、水運による搬出も容易で、中世初頭から荘園米の積出港として豊かな港町経済を担っていた。

主に備後地方を中心に燈籠、狛犬の傑作を残しているが、遠くは山口県、島根県、姫路市内にも彼の作品が残っている。

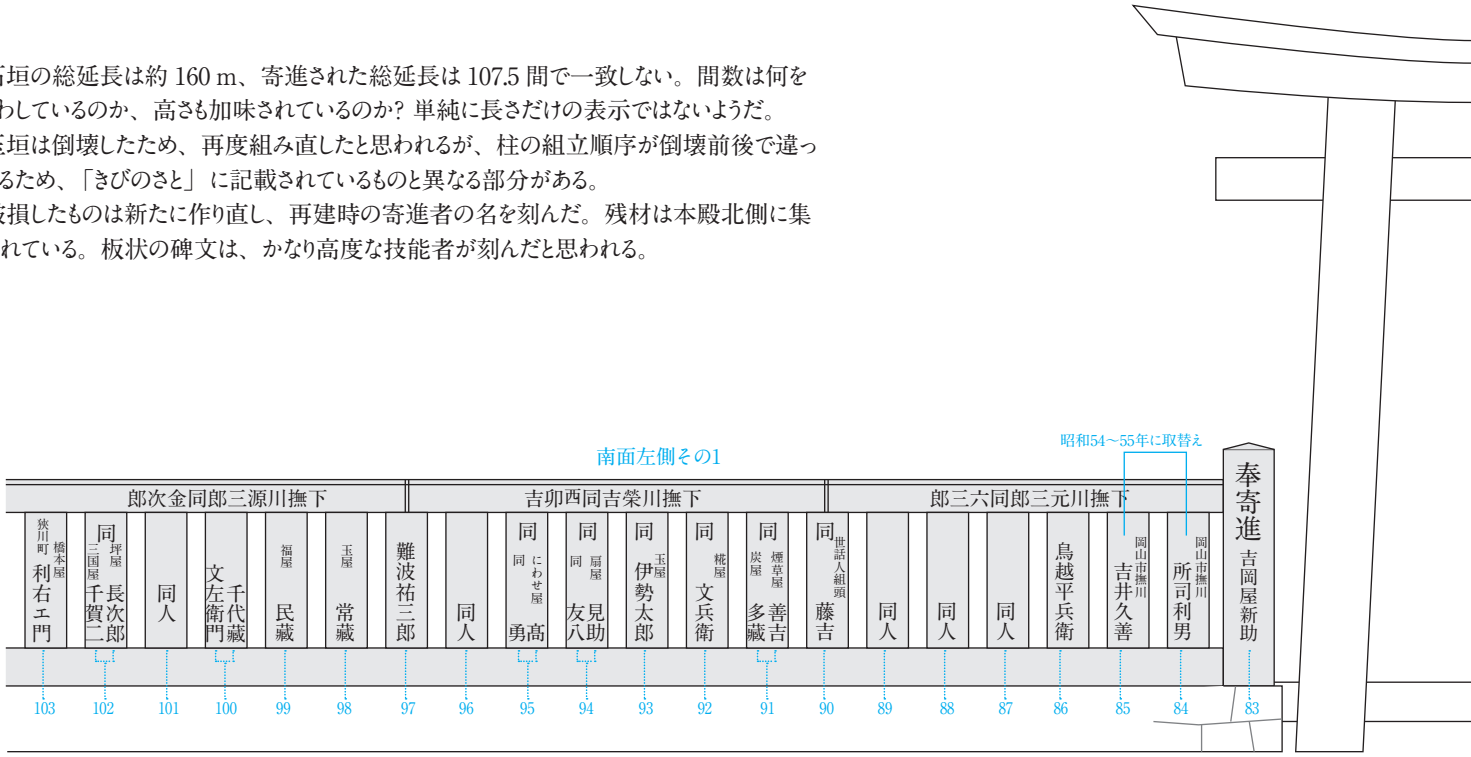
太平の世となり備後の石工は城郭建設が無くなり、優れた技術を寺社・民生に発揮した。この狛犬の寄進者は多くの廻船業者が名を連ねている。「阿吽の形相で子を守る獅子を彫った一対の狛犬は珍しい」と氏子の人が話していた。

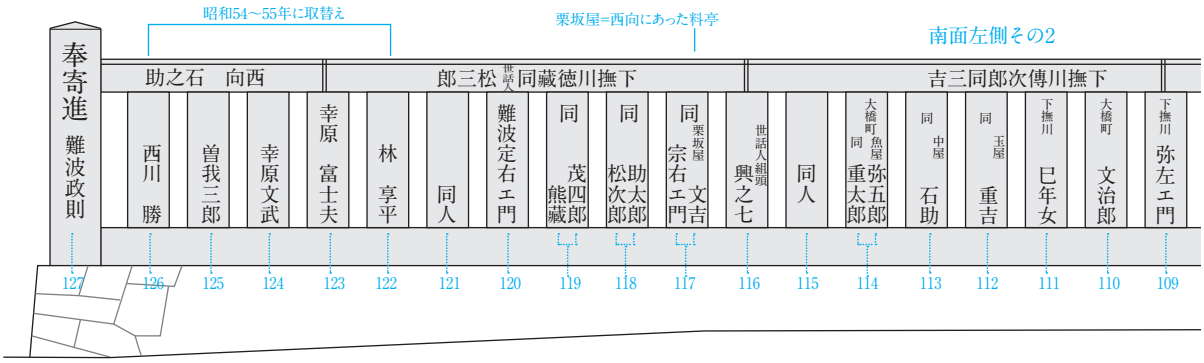
須佐之男神社　玉垣碑その1

石垣の総延長は約 160 m、寄進された総延長は 107.5 間で一致しない。間数は何をあらわしているのか、高さも加味されているのか？ 単純に長さだけの表示ではないようだ。

玉垣は倒壊したため、再度組み直したと思われるが、柱の組立順序が倒壊前後で違っているため、「きびのさと」に記載されているものと異なる部分がある。

破損したものは新たに作り直し、再建時の寄進者の名を刻んだ。残材は本殿北側に集積されている。板状の碑文は、かなり高度な技能者が刻んだと思われる。





■大橋 万納屋 儀助について

2012 年（平成 24 年）8 月、愛媛県南宇和郡愛南町の岩井義晴（72）さんの問い合わせにより、次の事が分かった。

愛南町一本松に「まんのうやお長」さんのお墓があり、位牌には「文化十年九月晦日 備中戸川領なつ川 まんのやお長」とある。この人は女性遍路で、巡礼の途中行き倒れになりここに埋葬された。毎年 8 月 16 日には「まんのや踊り」という盆踊りをして霊を慰め、地域の方々に手厚く守られている仏様である。今まで不明であった生国に、200 年経って里帰りさせてあげたいと地元の関係者が考えた。

この話が、岡山市教育委員会を通じて当会に問合せがあった。

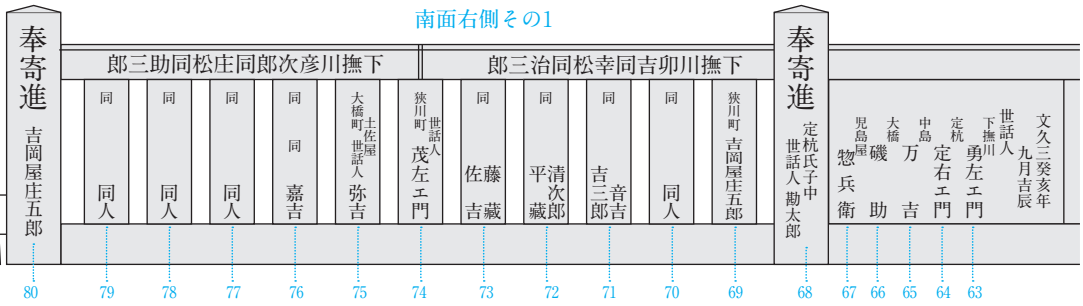
「きびのさと No.68」によると、万能屋はもと讃岐塩飽（しあく）諸島の出身で、いつ頃撫川へ来たのかは知れないが、かなりその道に名を知られた宮大工で、傍ら料理店を開いていた。観音院の墓碑に「文化十二乙亥年六月十一日 満んのうやかよ」の墓石があった。（今は整理され現存しない）

私たちの調査では、松林寺の太神宮本殿の玉垣に「天保十四癸卯秋八月 万納屋 和三郎」の銘があり、また須佐之男神社の玉垣には「文久三年九月 万納屋 儀助」の銘がある。この碑は文化十年（1813）九月のお長さんの死から 50 年経っている。

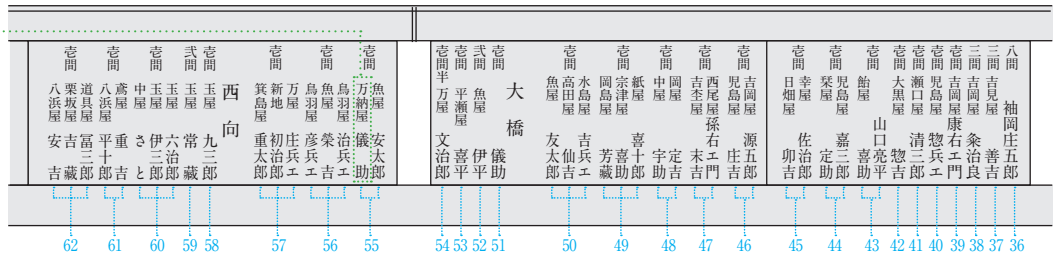
これ等の屋号は何れも「万納屋」と書かれており、類似の名前もなく一族と思われる。

2012 年 8 月 10 日（金）記　同年 8 月 22 日 山陽新聞に掲載

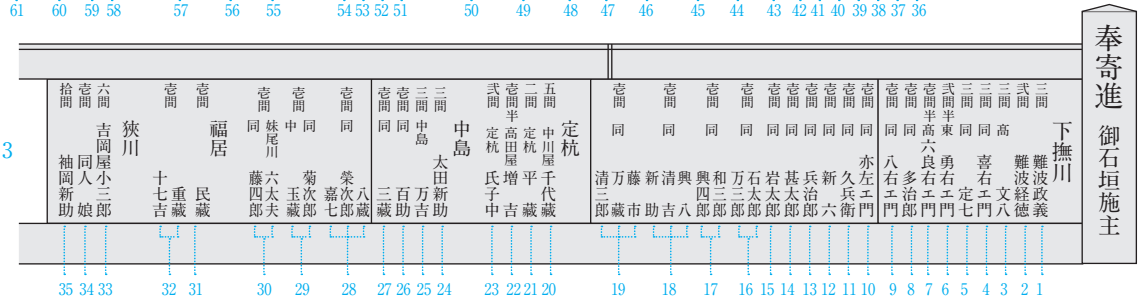
南面右側その1



南面右側その2



南面右側その3



須佐之男神社　玉垣碑名一覧表

須佐之男神社　石垣寄進者名簿　文久癸亥三年九月吉辰（1863）

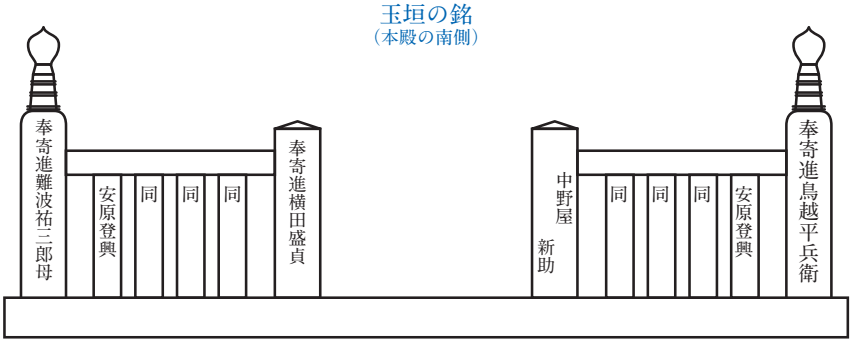
No.	柱	枝番	村　名	字	役割	屋号	姓	名	石垣幅	備考
1	35		挟川					新助	拾間	
2	36		挟川					庄五郎	八間	
3	33		挟川			吉岡屋		小三郎	六間	
4	20		定杭			中川屋		千代蔵	五間	
5	24		中島					新助	参間	
6	38		挟川			吉岡屋		粂治良	参間	狛犬の寄進
7	37		挟川			吉見屋		善吉	参間	狛犬の寄進
8	4		下撫川	高				喜右衛門	参間	
9	5		下撫川	高				定七	参間	
10	25		中島	中島				万吉	参間	
11	6		下撫川	東				勇左エ門	弐間半	
12	1		下撫川					政義	弐間	
13	2		下撫川					経徳	弐間	
14	59		西向			玉屋		常蔵	弐間	
15	3		下撫川	高				文八	弐間	
16	21		定杭	定杭				平蔵	弐間	
17	23		定杭	定杭				氏子中	弐間	
18	22		定杭			高田屋		増吉	壱間半	
19	7		下撫川	高				六良右エ門	壱間半	
20	52		大橋			魚屋		伊兵	壱間	
21	40		挟川			児島屋		惣兵衛	壱間	
22	41		挟川			瀬口屋		清三郎	壱間	
23	42		挟川			大黒屋		惣吉	壱間	
24	58		西向			玉屋		九三郎	壱間	
25	53		大橋			平瀬屋		喜平	壱間	
26	54		大橋			万屋		文治郎	壱間	
27	34		挟川			吉岡屋		小三郎娘	壱間	
28	39		挟川			吉岡屋		康右エ門	壱間	
29	8		下撫川	高				多治郎	壱間	
30	9		下撫川	高				八右エ門	壱間	
31	10		下撫川	高				亦左エ門	壱間	
32	11		下撫川	高				久兵衛	壱間	
33	12		下撫川	高				新六	壱間	
34	13		下撫川	高				兵治郎	壱間	
35	14		下撫川	高				甚太郎	壱間	
36	15		下撫川	高				岩太郎	壱間	
37	26		中島	中島				百助	壱間	
38	27		中島	中島				三蔵	壱間	
39	31		福居					民蔵	壱間	
40	51		大橋					磯助	壱間	
41	43	1	挟川					亮平	半間	
42	43	2	挟川			飴屋		喜助	半間	
43	55	1	大橋			魚屋		安太郎	半間	
44	48	1	挟川			岡屋		定吉	半間	
45	44	1	挟川			児島屋		嘉三郎	半間	
46	46	2	挟川			児島屋		庄吉	半間	
47	45	1	挟川			幸屋		佐治郎	半間	
48	61		西向			蔦屋		重吉	半間	
49	44	2	挟川			繋屋		定助	半間	
50	48	2	挟川			中屋		宇助	半間	
51	47	1	挟川			西尾屋		孫衛門	半間	

No.	柱	枝番	村　名	字	役割	屋号	姓	名	石垣幅	備考
52	61		西向			八浜屋		平十郎	半間	
53	45	2	挟川			日畑屋		宇吉	半間	
54	55	2	大橋			万納屋		儀助	半間	宮大工
55	46	1	挟川			吉岡屋		源五郎	半間	
56	47	2	挟川			吉埜屋		末吉	半間	
57	16	1	下撫川	高				石太郎	半間	
58	16	2	下撫川	高				万三郎	半間	
59	17	1	下撫川	高				和三郎	半間	
60	17	2	下撫川	高				與四郎	半間	
61	29	1	中島	中島				菊次郎	半間	
62	29	2	中島					玉蔵	半間	
63	30	1	中島	妹尾川				六太夫	半間	
64	30	2	中島	妹尾川				藤四郎	半間	
65	32	1	福居					重蔵	半間	
66	32	2	福居					十七吉	半間	
67	50	3	挟川			魚屋		友太郎	壱 /3 間	
68	56	2	大橋			魚屋		栄吉	壱 /3 間	
69	49	3	挟川			岡島屋		芳蔵	壱 /3 間	
70	49	1	挟川			紙屋		喜十郎	壱 /3 間	
71	62	2	西向			栗坂屋		末蔵	壱 /3 間	
72	57	2	大橋			新地		初治郎	壱 /3 間	
72	50	2	挟川			高田屋		仙吉	壱 /3 間	
73	60		西向			玉屋		六治郎	壱 /3 間	
74	60		西向			玉屋		伊三郎	壱 /3 間	
75	62	1	西向			道具屋		富三郎	壱 /3 間	
76	56	1	大橋			鳥羽屋		治兵衛	壱 /3 間	
77	56	3	大橋			鳥羽屋		彦兵エ	壱 /3 間	
78	60		西向			中屋		さと	壱 /3 間	
79	62	3	西向			八浜屋		安吉	壱 /3 間	
80	57	1	大橋			万屋		庄兵エ	壱 /3 間	

No.	柱	枝番	村　名	字	役割	屋号	姓	名	石垣幅	備考
81	50	1	挟川			水島屋		吉兵衛	壱 /3 間	
82	57	3	大橋			箕島屋		重太郎	壱 /3 間	
83	49	2	挟川			宗津屋		喜助	壱 /3 間	
84	18	1	下撫川	高				與八	壱 /3 間	
85	18	2	下撫川	高				清吉	壱 /3 間	
86	18	3	下撫川	関戸				新助	壱 /3 間	
87	19	1	下撫川	東				藤市	壱 /3 間	
88	19	2	下撫川	東				万蔵	壱 /3 間	
89	19	3	下撫川	東				清三郎	壱 /3 間	
90	28	1	中島	中島				八蔵	壱 /3 間	
91	28	2	中島					栄治郎	壱 /3 間	
92	28	3	中島					嘉七	壱 /3 間	
93	86						鳥越	平兵衛	№87,88,89 同人	
94	98						難波	祐三郎		
95	119						難波	定右エ門	№120 同人	
96	127		下撫川				難波	政則		親柱
100	112	1	大橋町			魚屋		弥五郎		
101	112	2	大橋町			魚屋		重太郎		
102	95	1				扇屋		見助		
103	95	2				扇屋		友八		
104	116	1	大橋町			栗坂屋		文吉		
105	116	2	大橋町			栗坂屋		宗右衛門		
106	93					糀屋		文兵衛		
107	67				世話人	児島屋		惣兵衛		
108	74		挟川町		世話人	児島屋		茂左衛門		
109	92	2				炭屋		多蔵		
110	92	1				煙草屋		善吉		
111	94					玉屋		伊勢治郎		
112	100					玉屋		常蔵		
113	110		下撫川			玉屋		重吉		
114	104	1	下撫川			坪屋		長次郎		
115	75		大橋町		世話人	土佐屋		弥吉	№77 ～ 79 同人	
116	76		大橋町			土佐屋		嘉吉		
117	111		下撫川			中屋		石助		
118	96	1				庭瀬や		高		
119	96	2				庭瀬や		勇		
120	105		挟川町			橋本屋		利右エ門		
121	101					福屋		民蔵		
122	104	2	下撫川			三国屋		千賀二		
123	69		挟川町			吉岡屋		庄五郎	№70 同人	
124	80		挟川町			吉岡屋		庄五郎	親柱	
125	83					吉岡屋		新助	親柱	
126	63		下撫川		世話人			勇左エ門		
127	64		定杭		世話人			定右エ門		
128	65		中島		世話人			万吉		
129	66		大橋		世話人			磯助		
130	68		定杭		世話人			勘太郎	氏子中	
131	71	1	挟川町					音吉		
132	71	2	挟川町					吉三郎		
133	72	1	挟川町					清次郎		
134	72	2	挟川町					平蔵		
135	73	1	挟川町					藤蔵		
136	73	2	挟川町					佐吉		
137	81	1	下撫川					卯吉		

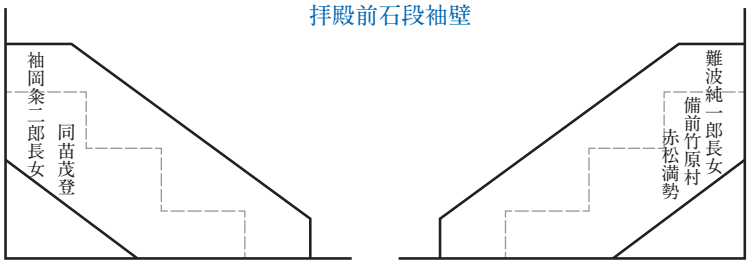
No.	柱	枝番	村　名	字	役割	屋号	姓	名	石垣幅	備考
138	81	2	下撫川					幸松		
139	81	3	下撫川					治三郎		
140	82	1	下撫川					彦次郎		
141	82	2	下撫川					庄松		
142	82	3	下撫川					助三郎		
143	90				世話人			藤吉		組頭
144	91	1	下撫川					元三郎		
145	91	2	下撫川					金治郎		
146	99	1	下撫川					栄吉		
147	99	2	下撫川	西				卯吉		
148	102							千代蔵		
149	102							文左衛門		
150	106		下撫川		世話人			弥左エ門		組頭
151	107	1	下撫川					源三郎		
152	107	2	下撫川					金治郎		
153	108		大橋町					文次郎女		
154	109		下撫川					巳年女		
155	114				世話人			與之七		組頭
156	115	1	下撫川					傳次郎		
157	115	2	下撫川					三吉		
158	117	1	大橋町					助太郎		
159	117	2	大橋町					松次郎		
160	118	1	大橋町					茂四郎		
161	118	2	大橋町					熊蔵		
162	123	1	下撫川					徳蔵		
163	123	2	下撫川		世話人			松三郎		
164	128		西向					石之助		
165	122						幸原	富士夫		昭和の人
166	124						幸原	文武		昭和の人
167	125						曽我	三郎		昭和の人
168	84		撫川				所司	利男		昭和の人
97	126						西川	勝		昭和の人
98	121						林	享平		昭和の人
99	85		撫川				吉井	久善		昭和の人

玉垣の銘
（本殿の南側）



東、西、北側の玉垣は、本殿焼失のとき破壊された。玉垣はコンクリート製で再建され銘は無い。創建時のものは南側のみ。

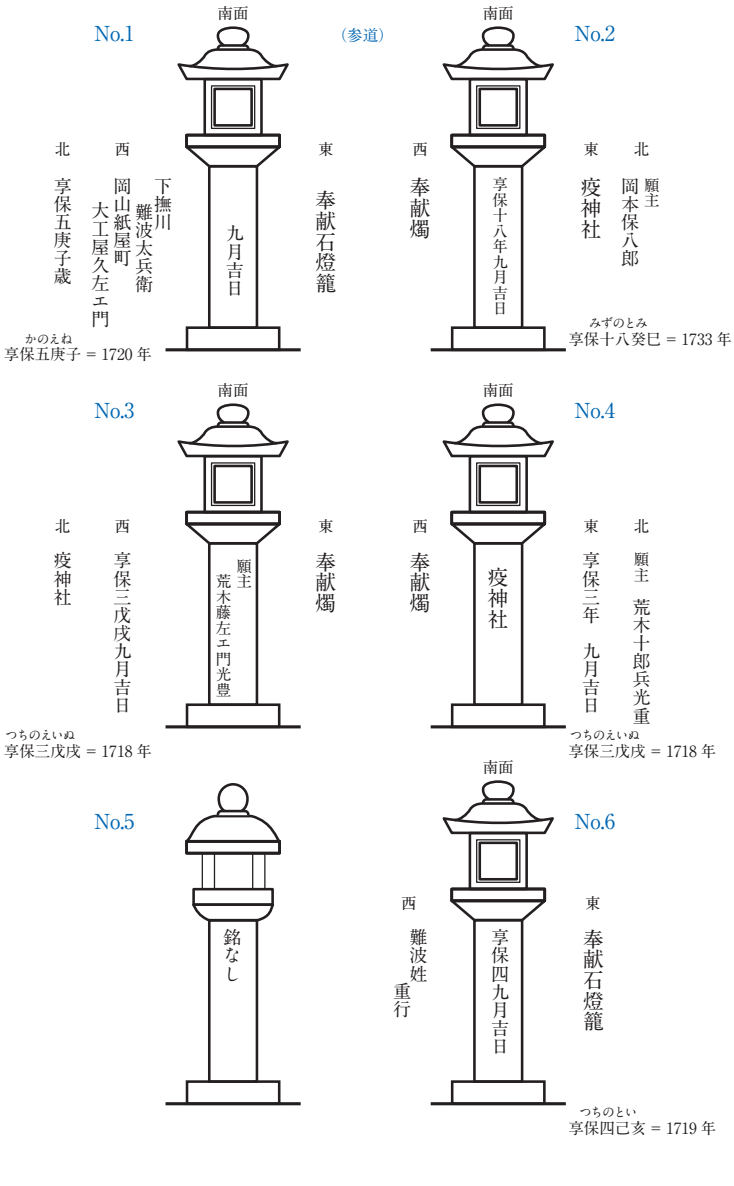
拝殿前石段袖壁



西側　　東側

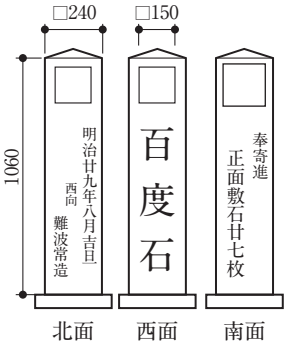
年代不詳
国境を越えての婚姻も一般的だったようだ。

燈籠（竿）の銘

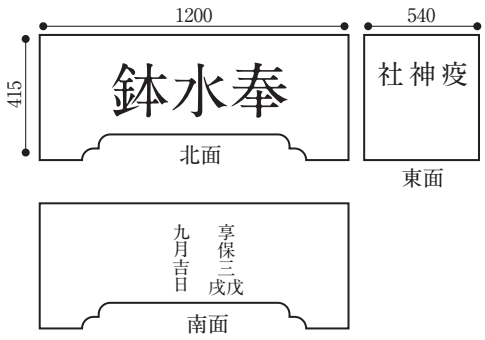


百度石

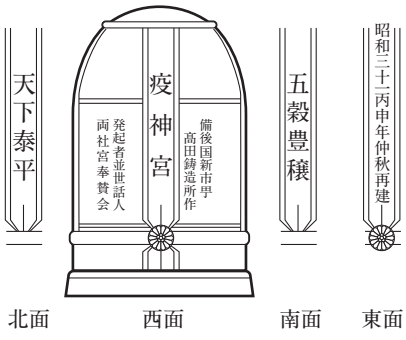
百度石
入れないで下さい


□240
□150
1060
明治廿九年八月吉日
西向　難波常造
百度石
奉寄進
正面敷石廿七枚
北面
西面
南面

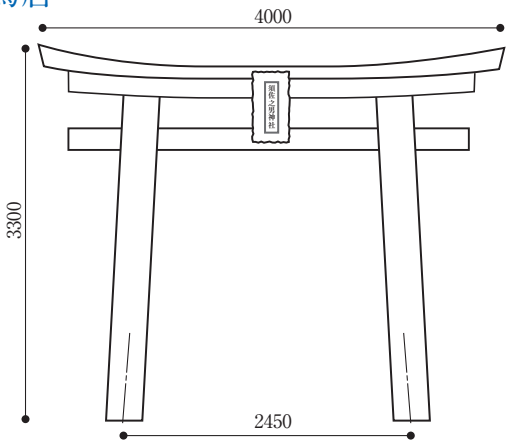
手水舎

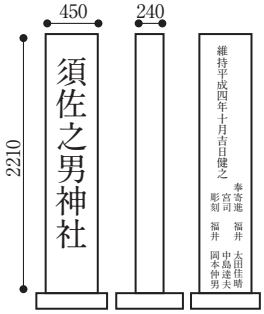

1200
540
415
鉢水奉
北面
社神疫
東面
享保三戌戊
九月吉日
南面

鐘楼


天下泰平
疫神宮
備後国新市早
高田鋳造所作
発起者並世話人
両社宮奉賛会
五穀豊穣
昭和三十二丁酉年仲秋再建
北面
西面
南面
東面

鳥居


4000
3300
2450
須佐之男神社


450
240
2210
須佐之男神社
維持平成四年十月吉日健之
奉寄進　福井　太田佳晴
宮司　中島達夫
彫刻　福井　岡本仲男

須佐之男神社

手水舎